

第13回 石川県・能登の里山里海

人と生物多様性が共存する里山里海
農協が売上減を招く農薬減を推進

棚田の美しい景観がモテている。高米価ではなく、外部経済（多面的機能）への報酬で支えられて棚田が元氣だ。また、農協が自らの販売を減らす減農薬、自然栽培を推進している。世界農業遺産認定と共に、能登には新しい風が吹いている。しかし、人口減少は激しい。なぜか。

1 人と自然が共存する里山里海

能登は祭りが好きだ。能登半島は「祭りの宝庫」といわれる。夏になると「キリコ祭り」が各地で行なわれる。半島は海に囲まれており、半漁半農の生活のため、豊漁祈願、豊作祈願の両方があるからであろうか？ 海の彼方から来る神様を祀り航海安全祈願もある。とにかく、能登は年中、「祭り」がある。

江戸時代、日本海側は「表日本」だった。北前船の交易によって栄えていた時代である。能登の北前船主たちは、海運業で巨万の富を築き、寄港地は大いに賑わった。蝦夷地（北海道）からの物資を、

日本海から関門海峡を経て大坂へ運ぶ西廻り航路が栄え、日本海側に物や情報が集積していたから、「表」と呼ぶに相応しかったのである。こうした富が祭りを発展させた。

大陸からも、文化が入ってきた。能登は奈良、平安時代にかけて、中国東北部にあった渤海と交易があった。漆や発酵技術も大陸からの伝来だ。

能登の風土記は、歴史も面白い。北前船や古代中国との交流が今日の能登文化を作っている。日本海に突き出た半島というジオ（大地―地形）の所産だ。

もう一つ特徴的なことは、里山・

里海の地域であり、森林、ため池、水田、川、海辺などがつながり、多種多様な生き物が生息している。

人々は豊かな自然と共生して暮らしてきた。半漁半農の営みがここにも反映されている。こうした農林水産業を営むことから、農耕儀礼や祭礼という独自の文化が育まれてきた。祭りが多い背景だ。

こうした地域固有の文化や景観、人々の営み、生物多様性が評価され、2011年、国連食糧農業機関（FAO）から「世界農業遺産」（GIAHS）に認定された

（国内初認定、佐渡島と同時）。システム名は「能登の里山里海」。認定地域は能登地域4市5町（奥能登の輪島市、珠洲市、穴水町、能

登町、中能登の七尾市、羽咋市、志賀町、中能登町、宝達志水町）面積1978km²、人口約18万人（2020国勢調査）。

認定の背景には、2010年、愛知県名古屋市中で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」において、「SATOYAMAイニシアティブ」の推進が採択されるなど、近年の「里山」に関する国際社会の関心の高まりがあった。

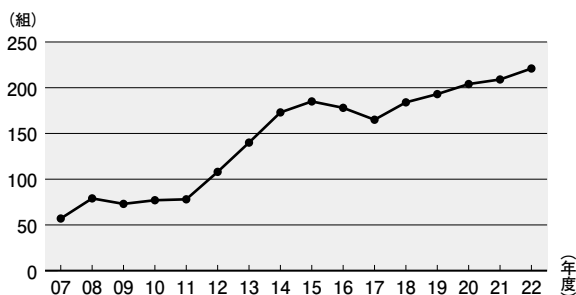
能登半島は世界農業遺産。国内初である。認定後、もう10年余り経つ。しかし、人口減少は激しい（後述表2参照）。能登は各地域とも、世界農業遺産の保全についての取り組みはしっかりしている。しかるに、人口減少は激しい。世

叶 芳和

1943年、鹿児島県奄美大島生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。元国民経済研究協会理事長。拓殖大学、帝京平成大学、日本経済大学大学院教授を歴任。主な著書は『農業・先進国型産業論』（日本経済新聞社1982年）、『赤い資本主義・中国』（東洋経済新報社1993年）、『走るアジア遅れる日本』（日本評論社2003年）、『新世代の農業挑戦』（全国農業会議所2014年）など。



図1：白米千枚田のオーナー会員数の推移



出所：輪島市産業部観光課調べ。

注：2022年度会員数 221組；オーナー 163組（年2万円）、トラスト 25組（1万円）、企業 13組（5万円）等。

2

オーナー制で支える棚田の景観

世界農業遺産は地域振興の効果が小さいといえよう。これは能登半島に限らず、全国11のGIAHS認定地域に共通することだ。なぜか。世界農業遺産認定は地域振興に貢献できていない。GIAHSの限界か。GIAHSはもともと「発

展途上国」向けのものであるが、「先進国仕様」を設計できないか。地域振興が目的ではないと開き直っては、GIAHSは終わる。そろそろ、こうした問題も考えるべき時期にきているのではないか（後述第6節参照）。

能登半島のシンボルは「白米千枚田」の棚田景観であろう。輪島市の日本海に面した海岸地区にあり、急斜面に小さな田が連なっていて、見事な景観を呈している（写真参照）。農水省による「棚田百選」

に選ばれており、能登の重要な観光資源になっている。農水省によると、「傾斜が急なほど、地区面積が大きいほど、棚田枚数が多いほど、1枚の面積は小さいほど……」優れた景観として評価が高い。白米千枚田は、小さな田の枚数が1004枚。地区面積4ha、傾斜度25%。観光客数は年間611万人に上る（2019年）。

白米千枚田は、江戸時代には8000枚、戦後の昭和27～28年（1952～53年）には3000枚あったが、1960年代から高齢化等で農業の担い手が減少し、棚田の荒廃が進んだ。景観の維持も困難となってきた。そこでボランティア制度や基金を設立し、棚田維持に取り組み、現在は1004枚に整備されている（2001年、国の名勝指定）。



写真1：能登半島の棚田（白米千枚田、輪島市）

現状は棚田オーナー制度が支えている（07年実施）。耕作放棄が進む中、地区の有志により「白米千枚田愛耕会」が組織され、オーナーに代わり棚田を栽培管理している。愛耕会の人たちは定年退職した非所有者で、約13人で活動している（名簿上は25人）。

自然の水が田んぼを潤している、夕日が落ちる場所にあり日照時間が長い（通常、棚田は山の中であり日照時間が短い）。土は珪藻土であり粘り気がある。美味しい米として有名なようだ。

なお、栽培品種はコシヒカリ（7割）とノトヒカリ（3割）。農業は

オーナー会員は年会費を払い（1万～5万円）、返礼として、マイ田んぼが持てる、作業参加できるほか、収穫米を5～20kgもらえる。会員は増加傾向にある。開始時は57組であったが、現在は221組に増えた（図1参照）。9割は継続会員である。

「この棚田の米は美味しいですか」。愛耕会代表の小本隆信氏に尋ねた。愚問であった。小本さん「美味しくない」と続かない。継続会員が多いということ、一度会員になると、止める人がいないということだ。

白米千枚田は、山の

観光客相手だから使えない。慣行栽培の5分の1と少ない。化学肥料は使っている。

補助金900万円で 売上6億円

この棚田、白米千枚田の成功には大きな教訓がある。筆者は40年前の農政論争を思い出す。

千枚田の保全には、輪島市から補助金が出ている。オーナー制度を支援するための補助金「景勝保全」費用400万円。冬場の観光誘客を図るため千枚田をライトアップする費用「あぜのきらめき」500万円。計900万円。

一方、白米千枚田への入り込み観光客数は、オーナー制開始時(07年)の229万人から、あぜのきらめきライトアップ開始や世界農業遺産認定の11年には421万人へ倍増、さらに増加を続け19年には611万人に達した(ピークは15年675万人)。観光客が実に多い。

「道の駅千枚田ポケットパーク」内にあるレストハウスで観光客が消費する金額を1人当たり1000円と仮定し試算すると、この千枚田での観光客の消費額は6億円である(ちよっと過大推計か?)。

900万円の補助金支出で、6億円の観光消費を引き出している。市はそこから税金がある。輪島市は商売上手だ。

白米千枚田を実際に管理しているのは千枚田愛耕会の人たちである。彼らには、日当8000円の労働費が出る。景勝保全補助金400万円のほか、オーナー会員の会費約400万円等が充てられる。千枚田の保全活動にとってはいい財源である。

生産者米価がいくら高くても、米価で棚田の米作りを守ることは無理であろう。景観を生かした観光事業になっているから棚田は守られている(普通の生産所得を試算すると、千枚田は4ha、コメ収穫量6tであるから、市場価格60kg当たり1万5000円と仮定しても、粗収入150万円である)。白米千枚田は景観が優れているため守られている。

かつて、食管制度がなくなると、効率の悪い棚田はつぶれると言われた。しかし、食管制度は廃止されたが(1995年)、白米千枚田は残っている。むしろ、美しい景観が観光資源となり、外部経済効果を発揮し、市場経済の下、発展している(注)。

注:筆者は若いころ(1980年代)、農業は先進国型産業という命題を提唱し、全国一律の高米価を守る食管制度を批判、農業への市場原理導入を主張した。農業団体、農業経済学者からは批判を浴びた。「市場原理を導入すると、小零細・高コストの棚田はつぶれる。お前は美しい景観で地域に役立っている能登の棚田をつぶすのか」と批判された。私は、「全国一律」の米価で守ろうとすると弊害が大きいので、地

3

塩の仕事、涙出るほどうれい

能登半島のもう一つの資源は海

である。珠洲市には500年前からの塩づくり技術、揚げ浜式塩田が今も残っている。「道の駅すず塩田村」(株奥能登塩田村)を訪ねた(1995年建設、珠洲市清水町)。ここも観光拠点である。年間入り込み観光客数17万人(コロナ前)。(株奥能登塩田村は製塩事業者であるが、珠洲市から「道の駅」の指定管理を受けている。なお、道の駅の道路を隔てた隣に、たった1軒、揚げ浜式塩づくりで500年間続く「角花家」がある。

古代から、塩は全国で造られていたが、明治以降、瀬戸内の大規模な塩田におされ衰退の一途をた

域に役立っているのであれば、それは米価ではなく、地域で補助金を出せばいいと応酬した(多面的機能への報酬)。美しい景観が観光客を呼ぶという外部経済効果が大きいのであれば、補助金を出せばよいというのが近代経済学の答えだからだ。

今回初めて能登の棚田を訪れ、棚田が市場経済の下で立派に存続していることを確認し、うれしかった。

どり姿を消した。

能登半島の塩田は、中世に稼働し、江戸時代には加賀藩の重要な産業に発展したが、1905年(明治5年)の塩専売法により、塩田は急激に減少した。97年に塩専売制度が廃止されたことに伴い、塩田の復活が相次いだ。揚げ浜式製塩は全国で唯一、当地だけである。角花家を中心に保存会が結成され、その技術を今日に伝えてきたのである。

現在、外浦には製塩会社が8社あるが、うち3〜4社が揚げ浜式である(他は流下式4〜5社)。伝統的な茅葺屋根の釜屋などが展開し、貴重な景観となっている(流

下式製塩は1950年代に普及した新しい技術で、すだれを使って海水を濃縮し、「かん水」を作る方法で、省力的かつ稼働日数も多く、揚げ浜式より生産量が2〜3倍も多くなる。釜で煮詰める工程は揚げ浜式に同じ。

日本海に面した外浦の岩礁地帯のわずかな平坦地に石垣を築き、その内側を粘土で固めた上に砂利や砂を撒いて作った塩田である。揚げ浜式製塩は、海から汲んできた海水を塩田に撒き、天日で水分を蒸発させ塩分の濃度の濃い「かん水」を作る塩浜作業と、これを釜で煮詰めて塩を液晶化させる釜屋作業からなる（荒焚き6時間、本焚き16時間）。結構、肉体労働のようだ。徒弟関係の下、「潮汲み3年、潮撒き10年、釜焚き10年」といわれる（海水汲みは今はポンプアップ）。後継者難！

釜で煮詰める本焚きの火加減で、単にしょっぱいだけの塩になったり、旨味を感じる塩になったりする。本焚きするとき「にがり」成分を30%残すという。これが秘訣のようだ。この火加減とタイミングは自分で体験しないと身につかないという。この工程が一番の職人技の世界だ。

塩を作る親方「浜士^{はまじ}」の登谷^{とや}良一さんによると、浜士によって塩の味が違う。製塩作業は過酷であるが、「思い通りの良い塩ができたときは、涙が出るほどうれしい」という。取締役であるが、所得は「会社勤めの女の子より少ない」「仕事の喜び」はカネには代えられない、職は楽しくないとダメという。揚げ浜式塩田は2008年、国の重要有形民俗文化財に指定された。登谷さん「励みになる。これがないと、良い塩は作れない」。

登谷さん（1947年生）は、珠洲市生まれ、珠洲の学校を卒業後、建設関係の仕事に従事し、95年から塩田の仕事に就いた。

4

農協が自然栽培米を推進

能登は里山も良い取り組みが多い。自分の売上高の減少に結びつきかねない農業使用の削減を推進している農協がある。GIAHSに認定された能登には新しい風が吹いている。

棚田の営農継続を 狙った戦略

穴水町の「おおぞら農業協同組合」は、能登6農協で取り組む、

釜焚きの燃料には大量の薪が必要。塩田村の背後はコナラ、マツ、スギが生える丘陵地性の山地だ。スギの間伐が薪になる。つまり、外浦の当地は、里海（海水）と里山（薪）の恵みがある。

（株）奥能登塩田村の塩生産量は5・6t（目標10t）。仁^に江^え海岸のほか、同じ珠洲市大谷町馬^ま縹^{なぎ}海岸に生産に特化した塩田を持っている（当地は体験も）。大谷地区で塩分を濃縮した「かん水」まで製造し、それを当地で煮詰めて製品化している。

両地区で従業者は製塩14人、販売等15人、合計約30人である。売上高1億2000万円。

農業3割減のエコ栽培の「能登米」のほか、棚田では、農業5割減の特別栽培に取り組んでいる（3農協）。棚田米をブランド化し、営農継続を狙った戦略である。

この棚田米は加算金がある。60kg当たり、全農が1944円、各JAが2160円、合計4104円加算される（JA加算は3年前から）。令和3年の場合、仮渡金1万6000円、プラスJA加算2

160円、12月に全農分1944円が加算され、1万4704円であった。つまり仮渡金に38%も加算された。ブランド化の成果である（消費者段階では1kg当たり約100円高い）。なお、棚田米はきれいな山の水が田に降りてくるので、甘みがあつて美味しいという。

JAおおぞら営農部の浜中勝則部長の話によると、「通常、棚田は条件が悪く、一番先に放棄されるところだ。そこで、ブランド化し価格を高めることによって、営農の継続意欲を高めようという戦略である」。先に「売上の減少に結びつきかねない」と述べたが、営農意欲が高まれば、コメ供給の減少を抑制し、売上高の維持につながる。加算の「動機」が興味深い。

なお、この加算金（全農1944円）は、卸が認めたものである。佐渡米の加算金（1500円）は卸が認めない取引もあり、プール計算で農家の受け取りは600円であるが（6割はOKしない）、能登の場合、加算金は全額受け取れる。佐渡は量が多いからであろう。現在、エコ栽培の「能登米」は6農協で15万俵、農業5割減（特別栽培）の「棚田米」は80ha、250t（4166俵）である。棚

田米を増やしたいが（パルシステムなど卸からの要望も強い）、棚田は面積に制約があり、また高齢化もあって、増やせない。減少を抑制する程度だ。

米価が下落傾向にあるので、加算金制に取り組んでいる面もある。付加価値を求めて5割減農薬の推進である。市場原理（過剰供給→米価下落）が、農協を農薬使用削減へ動かしている。

無農薬の自然栽培で消費者志向

農協は農薬・肥料を売るのが仕事であるが、農薬や化学肥料を使わない栽培を推進している農協がある。

2017年7月、「道の駅のと千里浜」がオープンした（羽咋市千里浜町）。羽咋市初の道の駅である。道の駅としては後発の新規参入であり、特徴あるものにならないと成功しない。そこで、15年から駅のデザインに取り組んでいた野間仁さん（後に駅長、株東芝出身）は二つのテーマを考えた。一つは「自然栽培米」、もう一つは「イノシシ肉」である。この二つで製品差別を図る戦略である。

羽咋市では10年から自然栽培が

始まり、13年に行政とJAの共催で、自然栽培を志す「のと里山農業塾」が発足し、全国から塾生を受け入れていた。毎年、県内外から数十名の塾生が参加している。肥料・農薬を販売するJAが、自然栽培を推進している訳だ。当時のJAはくいの組合長自身がゴーストを出したものだ。

野間さんの自然栽培米への取り組みは総合的戦略である。自然栽培の農産物や加工品を販売することと他の道の駅や直売所にはない魅力を高め、消費者を道の駅に呼び込むためだけではなく（製品差別化）、オーガニックに憧れる都会人に来てもらって自然栽培に就農してもらおうと考えた。UITAを自然栽培農家の担い手に期待した訳だ。人口減少が続く農村の現実を考えた戦略である。発想がよい。

現在、自然栽培農家は38人、うち14戸が米を作っている。自然栽培米の面積は15・4ha、供給量30t。羽咋市の水田面積は2000ha（作付1280ha）、約1%が自然栽培米である。農家価格は60kg 3万円と高い（慣行栽培の米は1万円強）。道の駅での消費者価格は1kg 1000円。

表1：羽咋市神子原地区の人口推移（単位：人、%）

	羽咋市神子原地区		羽咋郡宝達志水町	
	人口	増減率	人口	増減率
2000	381	…	15,891	-3.2
2005	343	-10.0	15,236	-4.1
2010	323	-5.8	14,277	-6.3
2015	287	-11.1	13,174	-7.7
2020	234	-18.5	12,121	-8.0
2000～20増減率		-38.6		-23.7

出所：国勢調査（小地域集計）による。

この地域は、もう一つブランド米がある。「神子原米」だ。羽咋市神子原地区は県内最大級の棚田地帯で、人口減少が激しい限界集落である。05年、市役所職員がローマ教皇に「神子原米」を献上して一躍有名になり、ブランド化した（地区の名前がいい）。標高が高く、南向き、日照時間が長い地域である。昼夜の寒暖差が大きく、豊富な雪解け水の清流が流れる山

間地の棚田で丁寧に作られており、美味しいようだ。

神子原米は、特別栽培ではないが、独自規格のエコ栽培である。栽培面積は110ha、10a当たり単収は7俵（この地域の慣行栽培は8俵、なお自然栽培は3俵）。ブランド化の効果で価格は高い。JAには卸さず、直売所等で売っている。農家価格は60kg当たり2万1000円、消費者価格は1kg 1000円。

このブランド化は過疎高齢化に悩む神子原地区の地域振興の起爆剤になった。神子原米でお酒、酢、米菓、かりんとうなど加工品を造ったり、直売所「神子の里」を設置（参加者約100人、従業員10人、売上8500万円）、雇用を創出、過疎化抑制に効いた。確かにその効果で雇用創出、所得創出はあったが、過疎化抑制は一過性で、人口減少は続いている（表1参照）。農産品の振興だけでは農村居住人口の減少は避けられないようだ。

5

キリコ祭りの季節

能登は祭りが多い。筆者が7月初旬に訪問したときも、先週の能

登町「あばれ祭」が賑やかだったと話題しきり。能登の夏の始まり



写真2：荘厳な装飾のキリコ（輪島キリコ会館陳列）

である。7月から10月中旬にかけて、〃集落〃ごとに祭りが繰り広げられる。

輪島市の「キリコ会館」では、通年、「御陣乗太鼓」の実演が見られる（カレンダーに実演日程が記されている）。夜、数分遅刻して実演会場に行ったが（解説聞かず）、凄まじい舞である。鬼が怒り狂ったように太鼓を叩いている。「何で怒っているのか」（何に対して怒っているのか）、小さな子供に聞いてみたいと思ったほどである（純真な彼らは何を思うであろうか、想

像力を試したい）。

祭り好きの能登でも「キリコ祭り」は白眉といわれる。神輿（みこし）を供して道中を照らし、神様をお守りしながら漂い、乱舞しながら町内を練り回る祭りだ。いま生活できているのは神様からの賜り物であり、感謝の気持ちで灯明を「奉る」。キリコ（切子灯籠の略称）は神輿の足元を照らす御神燈である。

集落に神社がある。集落によって、大漁祈願であったり、五穀豊穡であったり、火を鎮める神への神事であったりする。何の神を奉るかは集落によって異なるが、灯籠が登場する祭りを総称して「キリコ祭り」と言っている。だから、数が多い。キリコ祭りは能登の人たちに欠かせない大切な宝である。なお、集落の競い合いがキリコ祭りが多数集落に残っているもう一つの理由である。

キリコ祭りは江戸時代に遡るが、今でも180地区で見られ、保存数は800基以上ある。能登一円で、7月から秋まで

続く。この期間、能登を旅すれば、必ずキリコ祭りに巡り合えるようだ。

集落が競い合う結果、キリコは巨大化していった（高さ15mも。キリコが主役、神輿が脇役と主従逆転の感あり）。漆塗りの1基1000万円もする豪華なものもある。大きいのは1000人で1基、6基出すと6000人の担ぎ人が必要だ。普段は町に居なくても、祭りに合わせて、週末、都会から帰省する。

海があつたから、文化が入ってきた。能登は8〜10世紀、奈良、平安時代にかけて、中国東北部にあった渤海と交易があり（福浦港）、大陸の文化が入っていた。キリコ祭りも、同じ日本海側、秋田、青

6

エピソード

能登は、世界農業遺産の保全に向け、いい取り組みが多い。上記の各地域単位の取り組みのほかに、地域資源を活用した商品・サービスの開発支援（いしかわ里山振興ファンド180億円）や、能

登地域への農業参入への促進（いしかわ農業参入支援ファンド200億円）など、県が金融機関と共

森のねぶた祭と同様、大陸の影響を受けたものだ。また、江戸時代には、北前船の港として、半島沿岸の良港は賑わった（特に輪島）。交易によって財を成した人たちが、キリコを豪華なものにしていた。北前船の影響は大きかったようだ。重要無形文化財の「輪島塗」も、北前船の寄港地を利用して、西は福岡から北はエトロフまで広範にわたり販路を拡大したから発展したといわれる。

能登半島の風土記は、北前船や大陸との交流が創ってきた。当時は日本列島の「表日本」だった。北陸が「裏日本」になったのは近世である。キリコ祭りは単なる郷愁か、「表」への復活につながるであろうか。

同して基金を作って里山里海の地域振興に取り組んでいる。〃担い手育成〃や〃商品開発〃という発想がいい。

しかし、能登地域の人口減少は激しい。表2に示すように、奥能登（2市2町）の人口はこの60年間で半分以下になった（59%減少）。2000年代を5年間隔で見ても

表2：能登半島の市町村別人口推移

(単位:人)

	輪島市	珠洲市	穴水町	能登町	奥能登計	中能登計
1960	57,244	35,827	18,179	39,278	150,528	183,521
1970	48,220	29,224	15,488	33,138	126,070	168,744
1980	45,115	27,351	14,044	31,277	117,787	168,955
1990	40,309	23,471	12,831	28,065	104,676	162,566
2000	34,531	19,852	11,267	23,673	89,323	149,940
2010	29,858	16,300	9,735	19,565	75,458	135,960
2020	24,608	12,929	7,890	15,687	61,114	117,998
1960～2020	-57.0	-63.9	-56.6	-60.1	-59.4	-35.7
2000～2020	-28.7	-34.9	-30.0	-33.7	-31.6	-21.3

出所：国勢調査。

注：中能登は七尾市、羽咋市、志賀町、中能登町、宝達志水町の2市3町。

表3：能登半島の人口集中地区（DID）面積

	DID面積 (km ²)	総面積 (km ²)	DID比率 (%)	【参考】 人口密度 (人/km ²)	人口増減率 (%)
輪島市	2.47	426	0.6	58	-28.7
羽咋市	2.02	82	2.5	249	-20.1
七尾市	3.43	318	1.1	158	-21.4
奥能登	2.47	1,130	0.2	54	-31.6
中能登	5.45	848	0.6	139	-21.3
金沢市	69.47	469	14.8	988	1.5
石川県	118.52	4,186	2.8	271	-4.1

出所：2020 国勢調査。
注：人口集中地区（DID）とは、人口密度が1 km²当たり4000人以上の地区が、隣接した地区との合計5000人以上の地域。
能登半島は表記中の3市以外はDID地区はない。

も、6・8%減、9・3%減、9・6%減、10・4%減と、むしろマインスが加速している（国勢調査）。「サステナブル」あるいは「次世代への継承」という視点からすれば、過疎化している地方にとっては人口減少の抑制こそ大きな課題である。

能登はいい取り組みをしている。

塩田村、白米千枚田、ワイン造り、棚田米加算、神子原米ブランド化等々。それでも、人口減少は激しい。なぜか。米、塩……伝統的商品群。ここに問題があるのではないのか。一生懸命やつても、人口流出を止め切れない。恐ろしい時代だという認識を持った方がいい。

子供たちは世界に羽ばたきたい

（人間の本性）。子供たちの夢、将来何になりたいか。少年少女の夢は大きい。また、昔とは夢の対象も違っている。伝統的商品の世界では羽を広げる場が少ないように思える。時代の変化。そこら辺に原因があるのではないか。GIAHSのコンセプト（遺産保全）はこの時代の変化についていけるものであろうか。筆者が各地を回ったどり着いた問題意識である。都市部はサービス産業が発展し、技術進歩を受けてイノベーションの可能性が大きい。それゆえ、自己実現を目指し、人が集まるのではないか。

表3に見るように、人口集中地区（DID）比率が高い地域（つまり都市的地域）は人口減少が小さい。逆もまた真である。つまり、GIAHS的特徴がある地域ほど、人口減少がみられる（半島の先端にある奥能登は伝統的な農林水産業が多くGIAHS的特徴が強い、人口減少率が大きい）。

サービス産業化が進んでいるのは先進国である。先進国の要素が多いほど、人口減少は少ない。GIAHSは「途上国仕様」になっているから、地域振興の効果が小さいのではないか。GIAHSは

認定を受けている地域でありながら、地元の人たちに普及していない場合が多いのもそのためであろうか。認知度が低い（GIAHS認定地域は日本の農村の典型でも平均でもない所が多い）。

発展のためには、「イノベーション」が必要だ。また、遺産の「保全」には農林水産業の「担い手」が必要であり、そのためには「経営」という視点が重要であろう。先進国モデルへの移行の際、検討すべき要素だと思う。

GIAHSは「システムの保全」であるから（保護ではない）、イノベーションを否定しているわけではない。近代システムは優れているように見えても、検証されていない。

それゆえ、人類の知恵の結晶であり、長い歴史の中で検証済みの「遺産」を保全しようというだけのことである。美学は人それぞれであるが、イノベーションを忌避しては地域の発展はない。

先進国初の認定を受けた日本であるから、生物多様性等の良い側面は生かしながら、GIAHSの先進国モデルを模索し、FAOに提案してはどうであろうか。今しばらく考えてみたい課題である。